明治三十三年　　生千九百年

至聖三者の略話

大日本ハリストス正教會編輯局發行

水島行楊　編述

020674-000-3

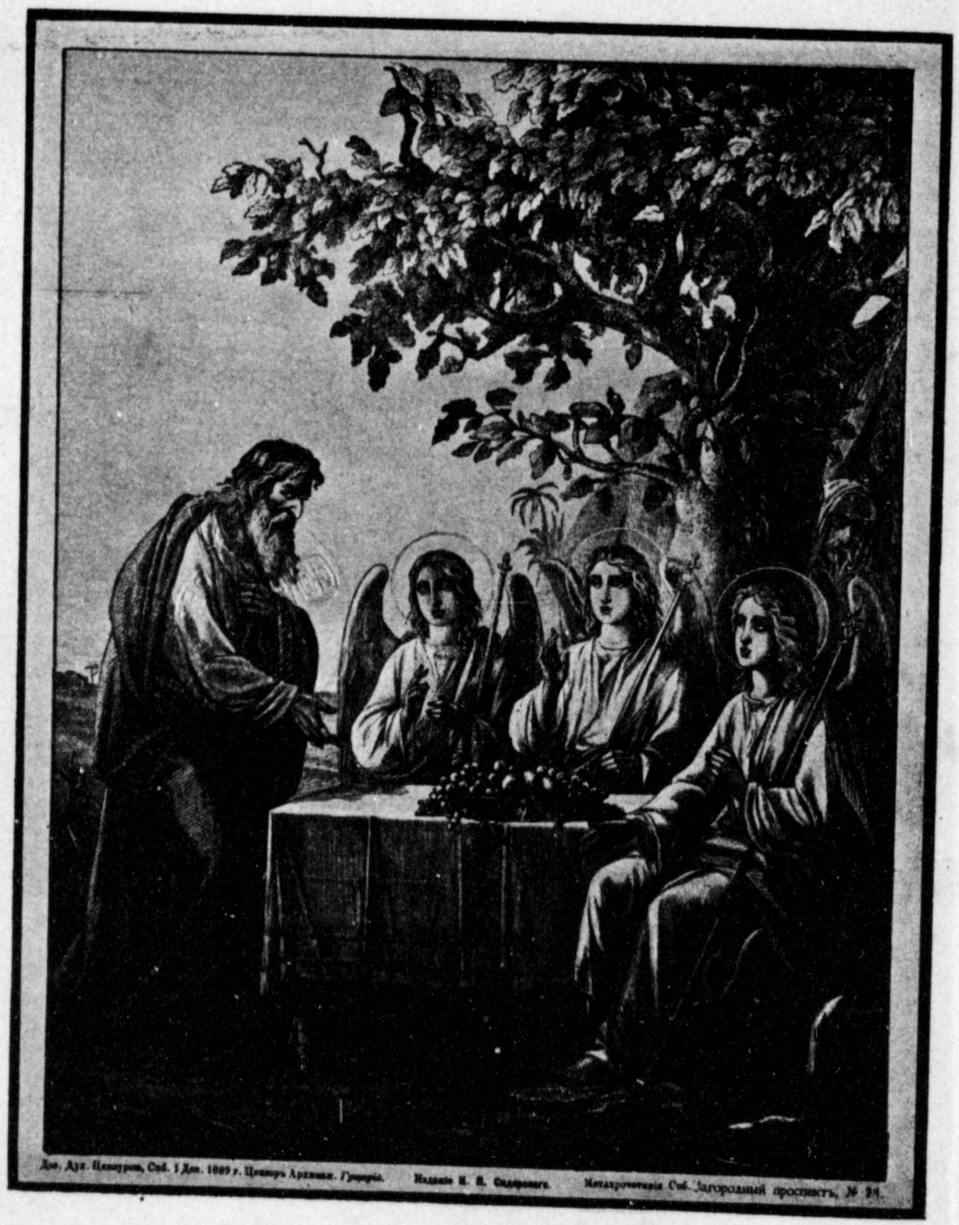
特52-545

至聖三者の略話

水島　行楊／編

M33

ABI-0491


Дозв. Цензурою, Спб. 1 Дек. 1889 г. Цензоръ Архиепис. Григорій. Изданіе И. Я. Сидорова. Литографія Спб. Загородный проспектъ, № 24.

聖三者

至聖三者の略話

摘要

〔第一回〕 三位一性の。
（本性惟一のかみ、三つの個位あると、ならびにそのくらゐの同等一體なると。）……一頁
〔第二回〕 至聖三者の特別なる性質。
（かみはその本性に於ては全く同等一體なれども、そのくらゐに於ては各々相異なると。）……九頁
其一、かみ父の特質。……十頁
其二、かみ子の特質。……十一頁
其三、かみ聖さんの特質。……十六頁

明治・内交・三

〔第三回〕三位一性の奥義に對する我らの心得。

（神妙幽玄の奥義には只淨き信仰を以て向ふべきと、及び我らが祈禱のとき、とくに三位中ある一位の名をとなふる理由。）……廿一頁

至聖三者の略話

〔第一回〕三位一性のこと。

（本性惟一のかみに三の個位あると并に其個位の同等一體あると。）

昔惟一の主かみにえらばれた民の太祖なるアウラアムが。ハナアンと申す國に在て『マンウリの樫樹』と呼ばるゝ大な樫樹の下に天幕を張て棲でをりました。ところが一日三人の旅人が現はれて其前を通らうとするのを見て、アウラアムは奔り出てこれを迎ひして地上に俯伏して『我が主よ、余はもし爾の御恩を蒙らば、どうぞこゝを素通りせずに、暫く止まッてくだされ』と申上げました。さうするとこの懇ろな願ひに由て、三人の旅客は、この信仰深きアウラ

アムの　棲居なる　樹下に　しばらく　た休み　に　なッて、いろ〳〵　と　ふしぎ　な　たはなし　が　ありました。その始末は、詳細　舊約全書に　みゐて　をります。（創世記　十八章の一から十五まで。）それは　略して、こゝには　只　その中で　一ばん　かんじん　な　至聖三者の　教に　ついて　のとだけ　申述べ　ましやう。

こゝに　いふ　三人の　旅人は、決して　たゞ　の　人間では　ない、すなはち　惟一の　主かみ　でゐつた　といふ　とは　聖書に　明かに　示されて　あります。そこで　たゞ　一つの　かみ　であれば　一人の　形で　あらはるれば　よい　のに、どうして　わざ〳〵　三人の　形を　かりて　あらはれ　たまふた　かと　申せば、これ亦　教會の　説明に　依て　惟一の　かみに　三つ　の　個位の　ある　とを　示された　もの　である　といふ　とを　悟られます。右聖　書の　記事に　は、アウラアムの　前に　『三人の　旅人が　あらはれた』とを　いひ、それに　つ　いで　アウラアムが　直に　幕から　はしり出て　これを　迎へ　地上に　伏拜して　『主や　余は　もし　あなたの　御恩を　蒙らば　云々』と　申した　とを　いふて　あります。こゝに『主』と

いふのは、勿論　只　一人に　對する　言です。又　かれは『あなた　がた』と　いはず　に、只『あなた』と　申しました。これ　すなはち　信仰の　大なる　たましひ　の　明るい　アウラ　アムの　目には、たしかに　かみ　の　至聖三者の　奥義が　わかり、かれ　は　三人を　見て　これを　一人として　伏拜した　のです、――三位一性の　主に　伏拜した　のです。――

元來　我等の　主かみ　が　只　一つ　である　只　一り　である　から　この上も　ない　一ばん　尊い　かみ　である　といふ　とは、世の中の　多くの　偶像や　異教の　かみがみ　に　高　くまさッて　我が　ハリストス教の　誇る　べき　ところ　ですが、只　これだけ　では　未だ　ハリストス教の　かみ　が　最も　著しく　異教の　かみがみ　にたちこゑて　ありがたい　といふ　ふ　とが　よく　わかりません。それは　異教の　中にも、かみ　の　惟一で　ある　といふ　とを　信じて　をる　者が　多少　ござります。すなはち　イウデヤ教や、マホメット教でも、かみ　の　惟一　だけ　は　みとめて　をります。又　自然神教とか　何とか　いふて『余は　ハリストス教會に　つかなくとも、かみ　の　惟一　だけ　は　知て　をる』と　いふ　やう　な　連中も

あります。けれども至聖三者の奥義をもちたまふかみは、只ハリストス教のまことのかみばかりです。三位一性の奥義だけはどうしても天の特別の啓示なるハリストス教に依らなければ分りません。すなはち我らの奉ずるかみは、たゞに惟一の本性であるばかりでなく、その個位に於て三つであるといふことは、ハリストス教のかみが最もいちじるしく異教のかみ〳〵にたちこゑてありがたくたふといゆゑんでございます。

かく惟一のかみに三つの個位があるといふことは、とくに舊約に於てかみのおしめしがあつたのは、前に引用した一例に依てもみとめられます。また聖預言者イサイヤは、かみの啓示に於て光榮なる主の寶座を繞り歌ふセラヒム（といふ天使の最高等なるもの）が『聖聖聖なるかな主よ』といふてをるのを見せられたことがあります。（イサイヤ六の三）こゝに惟一の主に向つて三回『聖々々なる』を呼だのは、やはりかみの個位が三つであることを示し、終りに『主』といふ言を以て其本性は只一つであるといふことを示したものでございます。

なほそのほかにも舊約に於て、たくさん啓示はありますが至聖三者の名が父と子と聖ゑんといふ其名稱まで示されて三位一性のもっともはっきりとした啓示は、新約になつてからでございます。それは舊約の時分は、大衆のたましひがまだ幼稚蒙昧を免れませんでしたから、もしもかみが一般にその個位の三つあることをおしめしになれば、たちまち大衆の民は、これを三つ別々のかみのやうに取てとんでもない迷ひを生ずるやうになるうれひがありましたゆゑにちゑふかきかみは、わづかに少數の聖人にその一端をお示しになつたばかりでした。けれども新約の時代になつては、だん〳〵人のたましひも進歩してこの至聖なる奥義を明かに示すことができる時期とありましたから、主イ、ス、ハリストスが世界に對する救ひの傳教にたいでになる發端に、——主の洗禮の日に、——至聖三者は著しいようすを以て世界に現はれました。すな

はち父は天から聲を以て、子は地に人の形を以て、聖ゑんは空に鴿の形を以てあらはれたとは、新約全書に詳かでございます。（マトフェイ三の十六、十七）主イエスはその御門徒らを世界の傳敎に遣はすに際し、もッとも明かにこの三つのくらゐの名を呼で仰せ出されました、――『汝等は往て悉くの民を敎へ、これに父と子と聖ゑんの名に依て洗禮を施せ』（マトフェイ廿八の十九、）と。このとほり三つの個位の名を擧げてこれを總括た『名』といふ言は單數でございます。これはかみには三つの個位があるけれども、この三つは互ひにたッといいやしいの區別なく、只一列に同樣にたッといかみでその本性は只一つに歸するものであるといふことをみとめるにたしかなるかみの直言でございます。

神學者なる聖使徒イオアンは、又あきらかにかみの三位一性を證明して『天に在て證をあすものは三つあり、父と言と聖ゑんなり、而してこの三つの者はすなはち一つなり』と申してゐます。（イオアン一書五の七に詳。）こゝに『言』といふのは、やはりかみの子のことをさして申したのです。（かみ子を「言」といふわけは、別冊に詳。）

かく父と子と聖ゑんの三つは、一つであるけれども、この三つは各自主自由ある個位で有てそれが各々自主自由をもちながら、本性の惟一に居て決して分れないといふのは、實にかみの圓滿神妙なるゆえんで我らはとても自分にかりに思ふてみることもできません。

前申すとほり父と子と聖ゑんは、決してこの中でどれがたッとくてどれがいやしいといふ差別なく、共に同等同權のかみである。かく申すとそれではかみの中にも互に衝突するやうなことがありはせぬかとうたがふ人もありましやう。なるほど互に尊いとも權力も同等で少しの優劣もないものが三個別々であるとすれば、時に或は衝突も免れないやうなものです。けれども、このことをよくたばねてかんがへねばなりません、父と子と聖ゑんは決して三個別々のかみではない、只個位に於ては別でもその本性は全く一つの

かみである全く一体で決して分れない離るゝことのできないかみであるといふことです、たとへば我らの耳と目はそのつかさどるところはちがふけれども、その尊いとは同等です。而して耳が二つと目が二つ共に一人の上にそなはつてあるけれども、この二つ若くは四つが決して互に衝突するとかいふことはすこしもありません。何人にも耳と目がけんかをしたといふ例もなく、目が耳と爭ふたといふこともありません。そのとほりかみ父は決してその子と爭ふといふことなく、かみ聖子は又決して父と子に意見を異にするなどといふことはありません。却てかみ父は子を愛し、子は聖子を愛し、又聖子は父と子を愛し、この三つは、互に相愛して世界のないはじめからいとさいはひにをらるゝものでございます。このとほりかみは愛である、かみの三位の關係は全く愛である。聖書にかみ父の直言を以てその子――イヽスヽハリストス――のことを『これはすなはち我が至愛の子、我がよろこぶところのものである』と仰せられたことが三回あらはれてをります。かの大にあつくかみの啓示をうけた聖使徒パエルは、衆信者に向ッて『願くは主イヽスヽハリストスの惠みとかみ（父）の愛と聖子の親みは、なんぢら衆人に在らんことを』と云てこれを證明してをります。（コリンフ後書十三の十四）

〔第二回〕至聖三者の特別なる性質。

個位に於ては三つであるけれども、本性に於ては惟一のかみとしてその本質は少しもちがふものでないといふことは、前回にはなし申したとはりですが、こゝにまた三つの個位の特質は各々ちがふてをるといふことを心得ておかねばなりません。すなはちかみ父には父の一種特別の性質があり、かみの子には子の一種特別があり、聖子には聖子の特別があるといふ

とです。この定理を正教會は左の如くにをしへてをります。

『一つのかみの性に父と子と聖ゑんの三つの個位がある、而して父は永遠の世の前にその本体から子を生み、聖ゑんを出したものである。

子は永遠の世の前に父から生れ、父と一体である。

聖ゑんは永遠に父から出て、父と子に一體である。』

其一、かみ父の特質。

このやうにかみ父は決して何からも生れず、出でず、たれからも存在をうけないで御自分が永遠の前にその獨一子を生み、かつ聖ゑんを出だすところの惟一の泉であります。すなはちかみ父は一切聖なる個位の根本であるといふことがその特別の性質でございます。聖書にこのことを明して、主イヽスヽハリストスは『父が自分に生命を持てをるとほりに、子にも生命をもたせる』と仰せられてあります。（イオアン福音五の二十六）こゝに『父が自分に生命をもつてをる』とは、すなはち何ものからも受けたのでないといふことがあきらかです。これ『父』といふ名稱の出たゆゑんで、ちようどこの世の一家に於て父が子孫一切の原因でその一家族をつらぬ合せてをる根本であるやうに、かみ父は至聖なる個位の原因でかつ各の個位をつらね合せてをる根本であるといふことをさとられましやう。なほかみ父についての教理は正教の『信經』第一條に簡明に述てあります。

其二、かみの子の特質。

かみ子の特質も聖書につまびらかです。すなはちこれを『父の子』と云ひ、『獨生の子』と云ひ、『（かみの）實子』と云てあります。（イオアン五の廿、三の十六、及ローマ書八の廿二）こゝにかみの子を特に『獨生子』といふのは、かみには子といふものは全くこのひとりに限り、決して人間のやうにたくさんの子があるものでないことを示すものです。又特にかみの『實子』といふのは、決して世の人の養子といふ

やうなぐあひでなく、實にかみ父の本體から生れたまことの子であることを示すのです。我ら信者のことを敎會で『かみの子』と申しますけれども、これはかみの本体から生れたいみではない、我らはかみから造られた物である。それがかみの子と名けられるのは、只そのふかきめぐみをうけるありさまからかたどつた言です。けれども聖なる個位にいふかみの子の名稱は、決してかたどりの言ではない、實にそのまことの子であるといふことは、右にかみの實子とあるに依てもたしかである、のみならず、聖書中にあらはれてをる主イエスキリストの行ひにたしかにかみの行ひがあることに依て一てんのうたがひもありません。

或はかみにはどうしてたつたひとりの子があるばかりで外にたくさんの子がないのかとあやしむ人がある かも知れません。がこれはもとより、かみの至聖至妙なる秘義に屬することで、我らがかれこれ探索すべきものでありません。こんなことを次から次へと探索すればさいげんもないことで、たとへば人間の中にも只ひとりでの外ない人もある。又たつた一人も生れない人もある。よし二十人の子を生んだ人でも、昆蟲が幾千匹といふたくさんの子を生むのにくらべてみれば、人の子の力がずッとすくない。とにかくこんなことをかみのくらゐについて議論するのは必要でない。それよりも我らはかみが我ら罪人をほろびから救ふためにそのかけがへのない獨生子をさへ惜まずしてわたくしになつたことをおもふてその愛のかぎりなきをみとめ、かつそのはかられぬあはれみに向ッて感謝することは大に必要でございます。

こゝにも一つ心得てたくべきは、かみの子が父から生れたといへば、何れの時代にかまだその生れない始めがあッたと思ふてはならぬことです。生れたとは云へ決して人間の父が前に在て子が後から生れたといふやうなわけではない。かみの子が父から生れるといふのは、只かりの言で人間の父

から子が生れるふしぎのようすからかりてとなへたのです。かつその生れは永遠の先に於ての生れです。まだ時代とか時間とかいふものは一切ない、人間が今想像することもできない始めなき永遠の先に生れたのであれば、勿論かみの子には生れたといふ始めはない。聖書に父が子を生んだことをいふて『我は今なんぢを生めり』と申してあるのは、(聖詠二の七)永遠の今生んだといふことです。すなはちかみは空間の主であると共に、時間の主であるから、時間の制裁を受けることがない。我らは一寸の場所をも借らずにはをることができないやうに、又一刻の時間をも免れることはできない。今日の何時何分何秒といふのは、今ちょッと瞬く間だけのことで、直に過去てしまふ。けれどもかみは永遠の主である、かみには過去現在未來の別なく、悉く今である。このやうなかみ父から永遠に生れたまふた主であれば、父が始めなきかみであるとはり、子も始めなきかみであるといふことは勿論です。この世界も何もできな

い前にかみ父が子を生んだといふことを一層あきらかに聖詠に歌ふて『我(父)は黎明の先になんぢ(子)を生めり』といふてあります。(聖詠百九の三。)『しの〳〵め』とは一日の中で一ばん早い時刻ですから、それから言をかりて世界のはじめ萬世の前にかみ父はその子を生んで、すなはちかみの子は絶對的はやく永遠に存在し、たまふことをしらせたものです。而してかみの子は父から生れても決して人間の父子のやうに別れて二體となるのではなくて、やはり一體であるといふことを聖福音經に象ッて、かみの子を『父の懷にあるもの』と名けてあります。(イオアン一の十八。)もしもかみが有形のものであッたならばこんなことはできますまい。けれどもかみは無形です、全く神靈である、ゆゑにかみの子が父から生れても全くはなれずといふ眞理はまことにあるべきことと信じられます。たとへば我らの言に現はれる思想は心から生ずる、乃ち思想は心から生れて別々に二体のものとなるかといへば決してさうではない、心と思想とつまり一

つである、決して人の中にこの二つが別れてしまふといふことはない。又かたちの上でも極精微な光のことについて考へてみれば、いさゝか分ります。すなはち大陽から光が生ずるけれども、日と光と決して分れてしまふのではない日は日として光は光として れの〳〵其特質を保ちつゝ一體である。かみ父から子が生れたといふ奥義はこのやうな例に依てわづかに其萬分の一にも足らぬ道理を推測するばかりです。無論かみからの特示(聖書と教會のをしへ)が有ればこそこれだけのともわかるのです。なほかみの子についての教理は『信經』の二條から七條までに詳かです。

其三、かみ聖ゑんの特質。

つひにかみ聖ゑんの特質も聖書に依てたしかです。主イイスハリストスはこの世に於てもはやその御門徒らと別れねばならぬ時節が近づいたとき、御門徒らの心をなぐさむるため、又これをしへ固むるために、慰誨者と名づる眞理の聖神を父から遣はすことを約束されました。(イオアン十五の廿六、)その お言の中に『眞理の聖ゑんは父から出る』といふことをもツとも明かに仰せられてあります。こゝに決して『聖ゑんは父から出んとする』といふやうな未來の言でなく、たしかに『父から出る』といふ現在の言をお用ひになッたのは、すなはちその『永遠に出る』とをさして仰せられたのです。ちようど主イヽス、ハリストスは御自分の存在の永遠を示すために『アウラアムが居なかッた先に余はもはや居る』と仰せられ、(イオアン八の五十八、)すなはち『居る』といふ現在の言をお用ひになッたそのことはりかみ聖ゑんのことについても『出る』といふ現在の言を以てその永遠に父から出るといふいみをお明しになりました。

このことはり聖ゑんは『出る』といふありさまを以て、父とも子とも異なッて一種特別であります。しかしこゝに『出る』と『生れる』とはどういふに區別があるか。今我が國で或地方の如きは、子が生れるといふことを只『出る』とい

ふてをる、『出來る』といふことをも又『出る』といふ。このやうな地方に向ツては、今かみの子と聖ゑんの、『生れる』と『出る』といふ大切な區別のあることも言の不完全なために混合になッてしまふかも知れませんが、かみの個位に於てこの區別はもッとも必要です。先づ『生れる』と云へば、親から子が生れるといふありさまをさす言、『出る』と云へば、生命あるものから生氣が發るありさまをさす言です。ゆゑに聖ゑんの『ゑん』といふ原語は『生氣』といふいみでござります。されば、これを聖氣と譯してもよろしい。けれども我が教會では多年の呼馴で『神』といふ文字を用ひてをる。此『神』といふ字を東洋では、『かみ』と『靈』の兩意に用ふゐらまとに困難である。それはとにかくかみの個位の『生れる』と『出る』との區別は、實際のところは、とても限りある人智によくはわかりません。このとについて古の聖なる師父は、左の如くに申してをります。（ダマスクの聖イオアン。）

『子は父から生れた、聖ゑんも同じく父からである。けれども、生れるのではなくて、出るのである。さうして生れるとは出るといふ間に區別があるといふことは、吾人もこれを知てをるけれども、その區別のありさまは實際どうであるかといふことは知ることができない。只子の生れも聖ゑんの出るのも、ともに父からであるといふことを知るばかりである。それゆえに凡そ子と聖ゑんのもッてをるところのものは、みな父からしてもッてをるのである』と。

聖ゑんのとについても心得ておかねばならぬ、聖ゑんは父から出るすなはち父から存在をうけたものであるけれども、その出るといふのは前に辨じたかみの子が生れる場合に於けるが如く永遠にして始めなきとである、――ゆゑにかつて父から聖ゑんが出なかッたといふ時代はない、かれはたしかに永遠に父から出るところの至聖なる個位である。又その出るのは、ひとり父

から出るだけで、決してある宗派の唱ふるやうに子からも出るといふことはない、至聖なる個位の泉は實に一つである、斷じて聖ゑんに限り二つの泉をもつといふことはない。もし聖ゑんが父からばかりでなく、子からも出ると、すれば、子も亦父からばかりでなく聖ゑんから生れるものとならねばならぬ。けれども斷じてそんな無法な道理はない。正教會は其『信經』第八條に於て明かに聖ゑんについての眞理を宣言してをります。その言に『聖ゑん主、いのちを施すもの、父より出で、父及び子とともにをがまれほめらる……』と申してあります。又聖ゑんが父から出で尙父と子とともに一体であるわけは、さきにかみの子の特質を明した塲合に辨明したのと同じ道理で、ちやうど人が活きてをれば必ず言とともに生氣が出るけれども、この生氣を決してその生命とことばから分けてしまふことはできぬ、又太陽には必ず光とともに熱がある、この熱を斷じて太陽からも光からも離してしまふことができぬやうあるものです。此通り生命を施すの聖ゑんは、父から出るけれども、決して父を離るゝことはない、此通り熱さ愛を以て我らを暖めたまふ聖ゑんは父と子と共にして居られます。

〔第三回〕三位一性の奥義に對する我らの心得

ハリストス教の奥義たる至聖三者の教理についてつい大略以上のやうに申し述べましたが、要するにこれはとても讀者一同に滿足を與ふるほどの説明ではありません。それはハリストス教の其他の教理とても、悉く分り切るものではない、否教理のみならず、何の學問でも、何の藝術でも、これでもう分らぬ所はないといふほど窮めつくすことはできるものではありません。けれども我ら人間に

は、ちゑの乏しいところを補ふだけの信仰といふものがあるから、信仰のはたらきを以てすれば、たとひちゑには分らぬとでも、目には見ぬとでも自然と得心することができます。さればその信仰とは果してどんなものかといふに、これもちょッと亦分らぬやうなものです。今まで心理だの、生理だのちふ學問が、開けても、みな人の年中實驗しつゝある睡眠ちふものは果して何であるかその理の根本まで窮めつくした説明はできぬ。我らは夜々夢を見ながら、夢の道理を述べることができない。さればも信仰もつひにそんなぐあひに何とも知れぬものかといふに、決してさうではない、人は苟も自分の知識を昧ましてしまはない以上は、信仰とても、決して無法無道理のものではありません。たとひ口には説明ができずとも、小兒が親を愛するのは、愛するだけの理由が備はつてあるからです。これ、とても他から持て往て俄かに引着るわけのものではない、全く天からの賦與である。そのとほり信仰はかみのたまものであ

る、知識にかゝはるけれども、知識以上のはたらきをするのは信仰である。信仰とは正直な心とさとき感情のはたらきであ。正直な小兒は、母から父のことを聞たばかりで少しもうたがはない。そのとほり我らは世界兆民の父なるかみのことを公なる母すなはち正教會から聞いて、かみの特示なる聖書から聞ただけで今は滿足せねばならぬ。至聖三者のことは至ッてむつかしいけれども、かみがこれを人間にお示しになッたのは、その救ひのために必要であるからです。もしも救ひに必要でないならば、いくらやすい教理でも示すには及びません。我らが一種信仰といふ作用を以てすればよし分らぬながら三位一性のことは、これを一位一性といふ無味無爲のかみにくらべてかんがへるによほどおもしろくかみの存在の圓滿完全なありさまを表明したものと信じられる。ゆえに我らはこのことについては聖書と教會のをしへに示されたところに從ふて、この外は古の智者の訓言に所謂『汝の分外にむつかしいことを尋ぬる毋れ、汝の

力に過ぎたことを試みてはならぬ、只汝に誡められたことを考へよ、かくれたことは必要でない、汝にはまた多くのつとめがあれば餘計のことは慮るに及ばぬ』といふ言を記憶すべきです。（シラフ書三の廿一、—廿三、）もちろんかみはいつまでもこれを知らせないのではない、時至れば すなはち我らがかみの恩寵を利用して天國の光榮に入るときになれば直接にかみの顔の光にてらされてその性の悉くの秘密をさとることができるものとなる。其とは聖使徒の僞りなき筆を以てかたく約束せられてあります、『かのときは主が我を知りたまふやうに我も深く主を知ることができる』と。（コリンフ前十三の十二、）數學をならふ小兒が四則の數理も未だよく分らぬのに一足飛に三角法の玄理を知りたいと望むやうなことはできぬ。我らも勉強忍耐して全世界の敎師の誡命を守るのが肝要でございます。

至聖三者の敎理は、最前に申したとほり一性にして分れないものであるから、我らはこの三者みな同等に惟一のかみとしてこれを尊ぶべきである。かの太祖アウラアムが三人をみて一人に對するやうにこれに伏拜したとほりに、我らも三位一性の主に伏拜すべきである。もつとも我らは平生特別に至聖三者のある一位に向つて祈禱することがある。これは三位の特質に因て、ある事業は特にある個位のしわざに歸するからである。たとへば世界を造つたことは特にかみ父のしわざであり、救ひの事業は特にかみの子のはたらきに成り、人を聖なるものとなすことは生命を施すことは聖玄んの恩寵であるからです。けれども我らはその一位を呼んで決して他の二位を除外ることはできません。口には父を呼びつゝ、心には子と聖玄んをも共に呼んでをる。只聖玄んに祈るときでも、實際は必ずこれと共に父と子を念じてゐます。なぜなれば彼らはみなすこしも分れずしていつも共に居り何事にも共にはたらきたまふ一性のかみであるからです。すなはち父はその全能の力を以て世界を創造りになつ

たけれども、その子なることばを以てこれをつくり、聖霊を以てこれにいのちをさづけられました。子は人間の救ひをなしたけれども、父の定旨と聖霊んの助けに因て行はれました。又聖霊んは人人を聖にするけれども、やはり父のいつくしみと子の功徳に因て成就したのです。而して我等は平生殊に多く子の個位主イヽス、ハリストスの名を呼ぶのは、どういふわけかと申すに、これ三位の中子のくらゐは、とくに人間界に降ッて御自分に人の性をもちたまひ人人にちかく接してあがないの大事業をとげられたからです。すなはち我ら罪人はとてもかみ父にすぐに近づくことはできぬけれども、主イヽス、ハリストスに依て近づくことができます。鴿のやうな淨き聖霊んはとても我らのやうな汚れたものの中にをらぬけれども、主イヽス、ハリストスの贖ひの功徳に由て我らは聖霊んの殿となることもできます。かみの子救世主はじつにかみと人の間をつなぐ仲保でござります。すべての願ひも、主イヽス、ハリストスの名に因てかみにきゝいれられるのです。かつじつにかみの言なる主イヽス、ハリストスに由て我らにかみのことを知ることができたのです。このありがたい至聖三者の妙理をもうかゞふことができたのです。ゆゑに我らは祈禱の際殊にハリストス救世主の名を呼ぶのみならず、このをしへの名稱をも殊に『ハリストス教』とゝなへます。けれどもこれと共に又父もかみである聖霊んもかみであるかれらはかみの子イヽス、ハリストスと共に一性一体のかみであるといふことを忘れてはならぬ。この三者は各位の特質を以てはちがふけれども、本性に於ては分けることのできない同一の能力權柄尊嚴と光榮を有する惟一のかみであるといふことをよく記憶せねばならぬ。かく余がしば〳〵同じやうなことを反覆したのは、この教理は我らの救ひのをしへの根本であるからです。我らのあがなひの大事業はかみが只一位一性でなく、又他のいみなき多くの數でなく、實に三位一性てふ妙巧の主であつ

たからです。さればある師父の中にはハリストス教のことを常に『至聖三者の數』といふてをる方もあるさうです。古のある聖人は『誠に父と子と聖霊を信じないならば、惟一のかみを認むることもできない』と申してゐます。（聖イポリトのことば。）

さようかみの三位を信ぜずして只單純にかみの惟一といふことだけを信ずといふのは、まだ全き信仰でありません。

どうぞ我らも一性なる至聖三者の惠みに因て、永遠に父と子と聖霊の國を光榮することを願ひましやう、アミン。

至聖三者の畧話

明治三十三年十一月十四日印刷
明治三十三年十一月二十三日發行

編述者兼發行者　水嶋行楊　東京府北豊島郡瀧野川村八十六番地

印刷者　神田靜次郎　東京市神田區淡路町一丁目一番地

發行所　大日本ハリストス正教會編輯局　東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

實價金三錢

參考書

再版聽教の勸め　增訂口繪入　全一冊（以下仝）……減價金二錢。郵税三冊まで二錢。

かみ造物主　畧話　口繪六枚入……價金四錢五厘。郵税三冊まで二錢。

かみの現れ（即ち主の洗禮）表紙畫及口繪入……價金二錢五厘。郵税四冊まで二錢。

かみのことば　妙高なる口繪入……價金二錢　郵税四冊まで二錢。

聖ゼんのこと　表紙畫及口繪入……價金三錢。郵税四冊まで二錢。

X-75